第４回　高槻市学校教育審議会 資料

第３回 高槻市学校教育審議会 学校視察の感想（抜粋）

【教育内容】

〇教育活動のPDCAのサイクルが理にかなったものであり、特にPDで終わるのではなく、教育の効果検証を示すルーブリックが明示されているのが優れていた。

〇3 ステージ制（4-3-2）の特に第２ステージの育ちに注力するという考え方。

〇義務教育学校を義務教育学校たらしめるのは９年一貫の教育活動である。

〇庄内さくら学園 SDG プログラムついては、人権教育をベースに分かりやすくまとめられており、興味深かった。ルーブリックによりめざす姿が簡潔で児童・生徒が理解できるものになっている。

〇ＳＤＧプログラムの内容・施設設備の素晴らしさから義務教育学校は大変魅力のある学校であることは間違いないと感じた。

〇前期課程と後期課程が融合することで生み出される効果を感じた。他学年との交流を意図的に設定することの良さが伝わってきた。

〇地域の子どもの課題にどう向き合うか。公教育でその課題をどこまで克服させられるか。そういった思いをもとにして、独自カリキュラム（SDG プログラム）を策定し、取り組んでいることが興味深かった。義務教育学校としての成果を生み出そうとする気概を感

じた。

○義務教育学校の特色は１年から９年までの子どもたちの育ちや学びが一度に見られること。

【組織体制】

○校長の説明は非常に説得力があり、中学校区が抱える様々な課題を地域と協働しながら改善するという思いに溢れていた。やはり学校を変えるのは先頭に立つ管理職の姿勢であると改めて感じさせられた。

○さくら学園に関わっている先生がやりがいを感じ、前向きに楽しみ、時には面白がって取り組んでいる姿に感銘した。

○「いろんなことがやっていけそう」という校長の言葉が、とてもうらやましく、素晴らしいと感じた。新しい枠組みの学校をつくったことで、子ども・教員・管理職・地域の方々…それぞれの立場から「やりがい」「挑戦」「有用感」といった前向きな感情が沸き起こっていることが伝わってきた。

○「９年生が卒業していくのを見送りたい、と、後期課程の免許をとろうとしている前期課程の教員がいる」「来たくなかった職員もいただろうが、昨年度末に異動希望を出したのは１人だけだった」という話がそれぞれ印象的。義務教育学校での勤務を通じて、教職員側の意識・仕事観も変わってきていることがわかるエピソードだった。

○（異動希望が１人であったことから）庄内さくら学園が教職員に評価されていると感じた。

○小中の教師が、一緒に教科部会に参加したり、授業交流などを通して刺激をもらったりすることで互いに励みになる。少人数すぎる自分のおかれている職場環境からは、うらやましく感じる。

○学校図書館、保健室など小中の担当が２人いることで複数対応できるのは強みである。

【地域】

○「学校をつくるのは地域である」という考え方やその在り様

○地域を活性化させながら一緒に学校づくりをしている。

○現在進めているコミュニティ・スクール制度とも大いに関連することから実施場所を選定された後、その地域とともに作り上げていくことが必要である。

【施設】

○一つの建物、一つの職員室にいる意義が施設一体型を推進していく理由になる。

○実用性・効率性・安全性を計画的に実現させた「校舎」は魅力的だった。あの校舎でないとできない教育がある、とひしひし感じた。

○１年から９年までの子どもたちの育ちと学びをつなぐために、他学年を意識できる環境に感銘を受けた。

○児童生徒が学びやすい環境を考えての設計・施工に児童生徒・教職員も満足している。

【課題等】

○校長の説明の中で、小中の教員の相互理解（指導法に関して）が最も苦労されているように感じた。

○前期・後期の先生の融合については、施設一体型小中一貫校であれば、慎重に取り組むことにより克服できるが、分離型の場合は非常に困難ではないか。

○教員同士のやりとりの中で、前期課程の文化と後期課程の文化がうまく融合していくかどうか、については、実際のところとても難しいことなんだろうな、と思わせる校長の話が随所にあった。教員の文化の融合は、義務教育学校の肝となる部分である。